

令和4年度9月の読書会のテーマ

## 「想像力を磨くには」

目的:「想像力を磨くためには何をすればよいか?」について考えてみる機会とする。

今回の読書会は、6月の読書会「喪失感情を感じてみる」に続くテーマとして、相手の心情を理解するために「想像力を磨くにはどうすればよいのか?」について考えてみる内容にしたいと思います。

### ○6月の読書会の感想文

6月の読書会の感想文を読んでいると、多くの方々より自分自身が体験していない喪失感情を感じてみるには、想像力を働かせてみるのが最も有効な手段だという感想が多くありました。

確かに過去の読書会の感想文を読んでいると、読書会に登場する人物と同じような体験がある人は、その内容をとても身近に感じる事ができることがわかってきました。

逆に、自分自身と馴染があまりない体験をした人のお話は、ピンとこないというか「ああそういう人もいたんだな」ぐらいな感想になる傾向があることに気づきました。

それは馴染みのある経験や体験で人は人に興味を持つ特性が誰にでもあるからだと感じます。

ただ、心に傷を抱えていることすらも無自覚でイライラし苦悶している子どもたちを理解する立場にある我々児童養護施設の職員としては、そのような過酷な境遇を生き抜いてきた子どもたちが抱えている、その子自身では処理できない、抱えきれない「辛さ」にさりげなく気づき寄り添うことをすることが求められています。

そのための想像力を磨く方法として有効と思う内容について触れていきたいと思えます。

それは子どもたちだけでなく、共に働く大人たちである職員理解にも役に立つことも期待できるからです。

### ○想像力を磨く手段としての読書

「何が何でも読書に結びつけてくるか!」という声がかた聞こえてくるような内容となります。

2018年の『NHKスペシャル AIに聞いてみた どうすんのよ!?ニッポン 第3回「健康寿命」』では、「健康寿命をのばすには、『運動よりも食事よりも、本や雑誌を読むことが大事!?』という画期的な提言がありました。

この内容はAIによる統計調査によって実証された内容として番組で扱われていました。

統計調査では、読書を習慣とするお年寄りは長生きし、しかもピンピンコロリで人生を終えることができる(長期医療にかかるネンネンコロリとは対照的に)ということと認知症にならないことも統計調査で実証されているとのことでした。

その他に読書を習慣にしている人はその他の習慣を持っている人よりもストレス耐性が強いことも報告されています。

運動や食事や音楽鑑賞やその他の娯楽よりも、読書が長生きして認知症にならず、ストレスに強く、フィジカル的にもメンタル的にも健康を維持できることが実証されているという内容は、とても画期的で驚きです。

しかしそれ以外にも効果があるとされているのは、想像力が磨かれるという内容です。

漫画や映画鑑賞よりも、文字を読むことでいろいろな世界を想像する力がつくことは、幼児教育の上で読み聞かせの重要性については実証されていることが報告されています。

最も効果的に乳幼児の脳と心の成長によいとされているのが、読み聞かせであるという内容です。

「知能指数＝IQ」と、「心の知能指数＝EQ」を育てるには、読み聞かせや読書の習慣であることも明らかになっています。

語彙数から脳神経細胞のネットワークが形成され、想像力が豊かになることで、問題解決能力や他者に対する共感能力(＝「思いやり」)が育まれることも確認されています。

○読書の中で想像力が磨かれる本は？

読書が、運動よりも食事よりも健康に良く、長生きしてピンピンコロリで死ねて、更にストレス耐性が強く、問題解決能力に優れ、他者に対する共感性や思いやりが育

まれる、とすれば、そのような読書の中で最も効果的な読書として善く知られているのが、歴史を学ぶ、とりわけ伝記を読むことだと言われています。

評論家の小林秀雄という人が歴史を学ぶことを下記の通り表現していました。

「歴史を学ぶとは、過ぎ去った過去が自分の胸の中に生き返ること」

「愛児を亡くした母は、何年経っても遺品を手にとれば、在りし日の子どもの顔がまざまざと甦るではないか」

「この例えの場合、遺品である絵日記やランドセルが歴史の資料で、その資料を介して子どもの姿が色褪せることなく甦る、それを歴史と呼ぶ、知識として残すだけでは歴史ではない」

と表現しています。

上記の内容は、まさに想像力を磨くためにとても大事な内容であると感じます。

読書が単に知識を得るためのものではなく、過去に生きた人たちの生き様が胸の中に色褪せることなく生き返るような想像力を活性化するものであることがわかります。

○子どもたちの歴史を学ぶことで想像力を磨くには？

上記の内容を、児童養護施設に入所している目の前の子どもたちの歴史、生い立ちを理解するには、児童票を読み込むことがとても大事になってきます。

ただその場合、児童票には断片的な限られた記載のみになっていることは我々は知っています。

児童票に書かれていない事実は、入所後に子どもたちがふと思い出したように語る時もあります。

また児童票の行間には、どんな出来事があったのか、そしてそれをどう子どもたちは感じ取っていたのか、映画を観るように情景がまざまざと見えるように理解することが、想像力を働かせて子どもたちの歴史を理解するということになります。

時には、子どもたちが大事にしている愛着のある玩具や写真、手紙などもそうです。

○書かれていない、表現されていないことをどう感じるのか

子どもたちは、ムンクやジョン・レノンのような卓越した表現方法をもった表現力はありません。

言語性においても、過去に追った心の傷(トラウマ)の表現は不適切な行動において表現されることが圧倒的に多いです。

私たち職員が、子どもたちのような喪失体験や小児期逆境体験の数々を味わった経験がないとすれば、そのような経験をしている人の伝記を読むことで、想像力が磨かれていくのではないかと思います。

読書(歴史や伝記)とは、自分以外の人たちが体験したことを、まるで目の前で起こっているように想像して感じて、泣いたり

笑ったり、喜んだり、感動したりすることです。

そしてそのような読書で想像力を磨くことができれば、目の前の子どもたちだけでなく一緒に働く職員理解にもつながっていくように感じています。

以前、私は読書は主体性を持つためである、と言いました。

今回の読書会のテーマは、他者理解、共感、想像力を磨く=思いやりを持つこと、でもあると思います。

「想像力を磨くこと=思いやりを持つ」には、「人の痛みをわが身に起きているかのように自分の痛みとして想像して寄り添うこと」が、読書によって身に付けることの中で最も大事なことで、古今東西の読書家より言われている内容です。

このことが周りの人たちに対して言葉だけでないレベルでできたなら、「その人にとって出会えてよかった」という存在になれるように思います。

アメリカの研究で虐待を受けた人が大人になって再虐待をしない人が7割おり、その7割の人たちの再虐待をしない共通の因子は「出会えてよかった、救われた」と思える人との出会いであると言われ、心理ケアを超えた最上位の因子であるという実証結果が出ています。

子ども一人ひとりの痛みや悲しみ、辛さをまるで我が事のように想像して感じ、寄り添う存在であることが、我々に求められている最も重要なことであると感じます。

\*今までの読書会は、私が提示したものを皆さんが読むものでしたが、これからは皆さんが皆さんと共有したいことを発信していけるような読書会を目指していきたいと思います。

原稿を募集しますので、是非とも皆さんと共有したいテーマがありましたら、情報発信していただきたいと思います。

(最後までお読みいただき有難うございました)